

## 女子大学生の健康認識についての一考察－専攻別による比較－

大西真由実・小林壽子, 渡邊貢次(愛知教育大学), 鈴木千春(愛知県立岡崎北高等学校), 藤井寿美子(愛知女子短期大学)

### 【はじめに】

Quality of life は高齢化社会の大きな課題であり、個人の健康意識を高めることが重要である。健康意識が高いことは生活習慣に大きな影響を与えると考える。また、それが職種への関心や選択となったり、専門を学習することによって健康観が育ってくるのではないのか。そこで今回、女子大学生で養護教諭を目指す者、看護・医療等を目指す者、それ以外の者を対象として健康意識等についてアンケート調査を行い、専攻別に比較検討した。

### 【研究方法】

1. 調査対象：全国の9大学・短期大学の女子大学生で養護教諭専攻学生（以下、養護学生）440名－平均年齢19.8±1.2歳－、看護・医療従事専攻学生（以下、看護学生）393名－平均年齢20.0±2.5歳－、それ以外専攻学生（以下、他学生）507名－平均年齢19.2±1.3歳－、合計1340名を対象とし、1999年10～12月に授業時などに記入してもらい、その場で回収した。
2. 内容：健康意識、生活習慣、身体状況、歯磨き習慣、内科・外科他9科に対する痛み・身近さ・大切さのイメージなど62項目からなる。（Ian McDowellら, 1996, 中垣ら, 1999）

### 【結果】

#### 1. 健康意識、身体・心の状態について

専攻別にクロス集計を行い、専攻間の比較を行った。「あなたの健康は」に対し、大変よいやややよいはいずれも約80%であり、専攻間に差はみられなかった。「あなたの健康状態は大変よい」「あなたの健康状態は最近よくない」でははっきりそうでないとそうでないが養護学生に前者では少なく、後者では多かった（ $p<0.01$ ）。

「この1か月で、身体に痛みはありましたか」ではなかったとごく僅かの痛みがあったが養護学生59.2%、看護学生54.7%、他学生72.0%であり、他学生に有意に多くみられた。

#### 2. 行動への支障について

「健康が理由で次の行動について支障（不自由）がありましたか」に対しては「重い物を持ち上げるような運動」「上り坂の歩行」「食事トイレの使用」に専攻間に有意差が認められた。「健康が理由で仕事、家事、学校に行くことに支障がありましたか」では、いいえが養護学生73.4%、看護学生57.8%、他学生80.7%で看護学生に有意に少なくみられた。「健康のために仕事、家事、学校での勉強ができないことがありましたか」では、いいえが養護学生79.7%、看護学生63.5%、他学生85.8%で看護学生に有意に少なくみられた。

次にそれぞれの項目について、いずれも高得点ほど状態がよいことを示すように3段階の尺度のはい（3か月より長く）を1点、はい（3か月以下）を2点、いいえを3点に得点化し、専攻別に平均点を算出した。その結果、「健康が理由で仕事…に支障が…」「健康のために仕事…ができない…」共に全ての専攻間で有意差がみられ、看護、養護、他学生の順に高い得点であった。

### 【考察】

専攻間で差のみられた項目全体を通してみると、得点は「養護<他」であり、身体・心を含めた健康状態全体が養護学生は他学生に比べてよくない状態であると認識していた。看護学生は自分の健康状態は養護学生よりはよいと捉えているが、身体の痛みや元気がないことを感じており、生活行動に支障があったり出来ないことがあったとの訴えが目立った。今回の結果から総合評価

を行うと、健康状態が優れていたのは、他学生であり、続いて養護学生、看護学生の順であった。

表1 主な質問項目と専攻間の得点比較

主な質問項目	養護	看護	他	一元配置
あなたの健康は	3.40	3.32	3.42	NS
あなたの健康状態は最近よくない	3.36	3.56	3.57	* 養看, 養他
この1か月の身体の痛み	4.66	4.55	5.00	** 養他, 看他
仕事や家事へ支障がありましたか	2.70	2.54	2.80	** 養看他

\*\*: $P<0.01$ , \*: $P<0.05$ , NS:有意差なし, 養他:養護と他の間に有意差あり